

巻頭言

正確迅速な情報について

高山赤十字病院院長 松下 捷彦

一般に、図書室の機能は、必要な情報の提供にあります。

情報ということばかり、最近経験したことで考えさせられたことをまず述べます。

6月25日夜の、JR高山線特急列車飛騨川転落事故の報道に驚かれた方は多かったと思います。たまたま私は岐阜へ出張していて、その一つ前の列車でしたから難は免れましたが、病院の職員から「大丈夫でしたか。乗っていませんでしたか」との問い合わせをいただいて事件を知り、早速、テレビのニュースステーションにチャンネルを合わせました。

一時は、久米さんの口から「けが人246名」という数字も語られたりしていました。真実は、被害者は軽症も合わせて16名で済み、列車も転落を免れたのですから、岐阜県庁防災課との電話でのやりとりを流したにしては、お粗末な誤報でした。

お粗末な誤報と、ニクニクしげに決めつけるのには訳がございます。その報道を聞きつけて、当院の医師・看護婦をはじめスタッフの少なからぬ人数の諸君が夜中の病院に、応援救護の必要があるのではないかと馳せ参じてくれたのです。日本赤十字社岐阜県支部からの派遣要請もあったりして、医師2人が高山市消防隊の車に乗って現地近くの病院へ向かいました。

善意の空振りでしたし、そのお2人のドクターは「夜中に良い訓練ができました。勉強させてもらいました」とおっしゃって下さって

救われましたが、県庁も日赤岐阜支部も高山市の消防署も、正確な情報を得る手段がなかったことを今後の反省材料としていただきたいものです。

情報化時代・情報社会と言われて久しいのですが、緊急時の情報の収集方法には問題が多くありそうです。

さて、病院図書室を語るにしていはイントロが長すぎました。

この原稿依頼は「この仕事に携わっている者が元気がでるような一文を」という枕詞とともにいただいたのですが、病院の経営基盤の危機が関係者の間では声高に語られているとき、独立採算性を強いられている病院の管理者としては、病院図書室を支えていて下さる皆さんに喜ばれるような方策やアイディアは簡単には思い浮かばないのです。

緊急時の情報収集について行政や日赤岐阜支部の対応をなじりましたが、これは責任逃れではなく、病院は正確な情報を得た、所謂その筋からの要請で動くべきものだと考えているからです。

ひるがえって、病院図書室に求められている情報提供サービスは、スタッフの欲しい情報が正確にT・P・Oよろしく揃えられることだと思われま。

本誌のVol. 15 No. 4(1995. 11)の巻頭言に兵庫県立尼崎病院の牧野院長が、コストパフォーマンスを考えた、これからの病院図書室のあり方を提言して下さいます。近畿

病院図書室協議会という立派な組織を活用しての、情報資源の共有化に関するご提言です。

リストラとか経営の合理化などという語が、日常、目の前にちらちらしている片田舎の病院の管理者には、この冊子の巻頭言の依頼を

受けただけでも荷が重いのに（光栄に思ってお引き受けしましたが）、皆さんを元気づけるような文章はなかなか書けませんでしたと、素直にお断りをして擱筆いたします。